

夏期講習だより

第5号

文責 仲田 雄哉 (飯島小学校)

7月4日(火) 第4回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第4回読み合わせ 令和5年7月4日(火)

読み合わせ範囲 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部 「善の研究」

第一編 純粹経験 第四章 知的直観

司会者： 小林 千景 先生(宮田中)

レポーター： 宮脇 結佳 先生(赤穂南小)

<宮脇 結佳先生のレポートから>

○余が現在に見ているものは現在のままを見ているのではない、過去の経験の力に由りて説明的に見ているのである。この理想的要素は単に外より加えられた連想というようなものではなく、知覚そのものを構成する要素となっている、知覚そのものがこれに由りて変化せられるのである。この直覚の根底に潜める理想的要素はどこまでも豊富、深遠となることができる。(P109、1-5行)

○知的直観といえは主観的作用のように聞こえるのであるが、その実は主客を超越した状態である、主客の対立はむしろこの統一に由りて成立するといつてよい。(P111、3-5行)

○かつていったように、真の一般と個性とは相反するものではない、個性的限定に由りてかえって真の一般を現すことができる、芸術家の精巧なる一刀一筆は全体の真意を現すがためである。(P111、7-9行)

- ・「哲学とは、本質を洞察すること。様々な物事の”本質”をとらえる営みだ。」「なるほど、それって、確かに本質的だと納得しあえることがある」という言葉を聞いて、学校教育の様々な場面において、”本質は何か”ということ意識するようになった。

「現在の知覚」と「過去の経験」

- ・自分が現在見ている物、例えば”コップ”があるとす。自分が”コップ”を”コップ”と認識できるのは、過去にそれを”コップ”だと知覚した経験があるからである。自分がコップだと思った物を、別の人は”カップ”と認識するかもしれない。
- ・ひたすら授業とは関係のないことをして、友達とのコミュニケーションにおいてもすれ違いがおき、教室からいなくなってしまうこともあったS君に対して、まずは自分が彼のことを知って信頼することが大切だと思い、関わっていった。すると、S君は頼りにされることが好き、人のために働くことが好きだということに気が付くことができた。S君と向き合ったことで、先生自身の知覚が変化し、また一方で、周りも変化したことによってS君自身の知覚も変化したのではないか。
- ・経験の少ない過去の自分が見た捉え方と、多くの経験を経た自分の捉え方は変わった。今後も自分の経験を増やし、様々な角度から物事をとらえることができるようになっていきたい。

主客の対立、一般と個性について

- ・子ども同士が、思いっきり一緒に遊んで楽しい時間を過ごした経験があつて、友達になる、というように相手を相手として認識し、認めるには、離れている状態ではなく、相手の中に自分が入り込むことで、”互いの存在を改めて認め合う”という関係になるのではないか。
- ・全体と個について、2つは相反するものではなく、一方があるから、もう一方が存在すると考える。子どもたちが毎日学校に来てくれるからこそ、自分自身が担任でいられると感じるようになった。

<グループ討議から>

- こういう人かもしれない、という第一印象が、経験によって変わってくるのがよくある。経験することの大切さを改めて実感した。
- この人はこういう人だという先入観をもって接してしまうことがあるが、先入観を捨てて、その人と向き合うことができれば、新たな部分に気がついたりできるのではないか。
- S君とのかかわりについて、担任の願いや想いが変わることで、子どもたちの意識や想いも変わってくることを、グループ間でも話し合った。
- 一般と個性について、全員が話を聞くことが本当に良いことなのか、という考えがあげられた。
- 宮脇先生のレポートを中心に話し合った。まずは、その子との信頼関係を築くことの大切さ、その子の良くないところを見るのではなく、良いところを見つけて、伸ばしていくことが大切であると、改めて感じた。
- 先入観を持たずに、一歩引いて、子どもたちのバックグラウンドを見ながらかかわっていくことが大切なのではないか。

<唐沢 正吉先生から>

- 宮脇 結佳先生のレポートについて、物事の本質が何か考えることが大切であると気が付いているところ、また、いずれの部分も素晴らしいレポートでした。
- モーツァルトが、楽譜を作る場合に、長き譜にても、画や立像のように、その全体を直視することができた。これは、モーツァルトに特別な力があるからではなく、経験や、努力を通じて1つ1つ会得をし、力を得たということ。
- 反省は統一への道である。宮脇先生は、S君を叱るのではなく自分が反省をして、自己の振り返りをし、S君と向き合っていた。その経験を経て、いろいろな見方ができるようになり、教師と子どもの関係がつくられていった。（統一が実現されていった。）
- 一本の赤いひもを提示させながら、始めはお互いにひもの端と端、つまり、相対しているが、その2つが統一されたとき、それは1つの同じものになると西田は言っている。
- ピンチはチャンスである。たとえば、手のかかる子どもがいるが、その子のおかげで、自分がより成長できる。統一への要素である。と見方を変えると、考えが変わってくるのではないか。
- 主客の対立、一般と個性について、子どもたちの対応によって、自分が“先生”でいることができる。例えば、自分が叱ったとき、子どもたちが静かに聞いてくれた。→子どもの対応のおかげで、自分の話をすることができ、“先生”でいることができた。
- 相手の中に自分が入り込むことについて、テストをする際に、その子が何点取れるかを予測できるくらいになれるとよい。